産経新聞　平成22年(2010年)7月9日　金曜日

# 障害者に学ぶ「さをり織り」

## 作業療法士めざす姫路獨協大生

姫路獨協大医療保健学部の学生が授業で、福祉事業所「さをり工房ゆう」（姫路市北条宮の町）の障害者から織物の技術を学ぶ取り組みを続けている。平成19年にスタートして以来、今年で4年目となり、8日も2年生約40人がカラフルな糸を通していった。担当の太田篤志教授は「授業が定着することで学生と地域との連携が深まってきた」と手応えを感じている。

授業は、作業療法学科の専門科目「作業学実習」。「さをり織り」は作業療法として用いられるほか、障害者の自立支援にも役立ち、授業は作業療法士を志す学生に障害者を理解するきっかけになればと始まった。

授業では、工房で働く障害者やスタッフが、さをり織りの土台となる縦糸の作り方から指導。織り機の使い方や糸の通し方などをていねいに教え、学生は真剣な表情で織り機に向かっていた。

6月から7月までに全5回の授業が行われ、完成した作品は学内や工房のギャラリーで展示されるという。

作業療法士を目指している西村奈緒さん(37)は「障害を持っている人は常識にとらわれない織り方を教えてくれ、勉強になる」。恒矢保範さん(21)は「自分の個性が出せるのが魅力。完成したら部屋に飾りたい」と笑顔を見せた。

工房の山口節子代表は「若い学生と出会え、いい刺激になっている。自主的に動ける人も出てくるなど障害者の日常生活にも変化が出ている」と話している。

「さをり織り」の技術を障害者から学ぶ姫路獨協大の学生（手前）